



TITLE:

大量生産されるロボット

AUTHOR(S):

児玉, 斗

CITATION:

児玉, 斗. 大量生産されるロボット. 京都大学文学部哲学研究室紀要
2009, 11

ISSUE DATE:

2009-03

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/71120>

RIGHT:

大量生産されるロボット

児玉 斗

1. カレル・チャペック『ロボット (R.U.R.)』

今更ではあるが、「ロボット」の語を造ったのはチェコ人カレル・チャペックであり、映像で表現したのはドイツ人フリッツ・ラングである。しかし「ロボット」そのものの概念は、『ロボット』や『メトロポリス』においては、「初」という点以上には発展を見せていないかのようである。以前からある「人造人間譚」の枠内での変奏に過ぎないかのように見える。そしてその後に展開される数多くの「ロボット譚」もまた従来の「人造人間譚」の矩を踰えていないようである。即ち、主人公ロボットの「生れ出づる悩み」が主題となり、折々そのロボットと人間との関係やロボットに重ねた人間自身の「生れ出づる悩み」が主題となったりするが、いずれにせよロボットの存在が物語の根幹である。だから「ロボット」は、「人造人間」「アンドロイド」「ドロイド」「サイボーグ」「機械化人間」「自動人形」「ゴーレム」、等々の意味の判別の付かない錯綜の中で無造作に使われている。『ゴジラ対メカゴジラ』において、「メカゴジラ」が「サイボーグ」とも呼ばれるように。或いはまた、『人造人間キカイダー』で全くの機械であるジローが人造人間（ルビでロボット）と呼ばれ、『ドラゴンボール』では「無から」の16号も人間ベースの17号18号も同じく人造人間と呼ばれるように。

しかし実は、チャペックの『ロボット』は毛色が違う。この作品の最大の売りが「ロボット」という語であることは言うまでもない。そして確かにこの作品でもロボットたちは「生れ出づる悩み」に突き動かされ、その結果人間を絶滅させることになる。しかしこの作品がその他の「ロボット物語」或いは「人造人間譚」と大きく違う点は、先ず第一に、この「ロボット」が大量生産品である、という点にある。つまり、同型の「ロボット」が工場で大量に生産されるのである。

殆どの「人造人間」は、狂気の科学者が実験室で一人怪しげな研究の積み重ねを経て、一体の「人間」が造り上げられる、というものであった。これは『メトロポリス』の中で制作されるマリアも同じである。やはり一人の狂気の科学者ロトヴァンクがその一体を作り出した。後のアトムも同じである。天馬博士が精魂傾けて作り出した作物である。これらの「ロボット」は、工業製品というより、手工芸品である。勿論大掛かりな機械装置で以て作り出すので「手工芸品」の定義には合わないが。とはいえつまり、手工芸の粋とし

ての人形が制作され、その人形が動くのであり、しかも自立的に動く、という点に、物語の興味はあった。同じロボットをもう一体、或いは多数、製作することは可能かもしれないが、製作者の欲するところではない。確かにアトムの子コバルトはアトムによく似た姿であるが、お茶の水博士が作ったのである。しかも日程の都合上、アトムほどの精密さを捨てて、完成させたのであった。

しかし『ロボット』はこのような像を完全に否定する。この戯曲は、ロッスムのユニバーサル・ロボット社社長のドミンが秘書ロボットのスラに口述筆記させているところから始まる。そしてその内容は「ロボット一万五千体の注文」であり、この「一万五千体」という数字が繰返される。しかも「(考え込むように)」というト書き付で。その後には、現在倉庫には「三十四万七千体」のロボットがある、とも述べられる。この莫大な数量の強調。勿論社長自らが、「ロッスムのユニバーサル・ロボット株式会社の工場はこれまでのところ統一規格の製品を作っているわけではございません。製品には繊細なロボットと荒削りのロボットがあります」、と付け加えているように、この「三十四万七千体」のロボットがそっくり同じ、というわけではないようであるが。

これに付随して、「どの教科書にも出ている」話のはずの「ロボット」創造譚の真実が明かされる。「狂った科学者」という従来の類型は「年寄りのロッスム」に帰され、「神を引きずり下ろそうとした」如何にもな彼は、甥である「若い方のロッスム」により実験室に閉じ込められ、憤死してしまう。彼は閉じ込められた実験室で何やら造っていたらしいが、「生理的な化け物」でしかなかった。対して「若い方のロッスム」が大量生産品としての「ロボット」を完成させる。この甥は「認識の時代のあとの生産の時代」という「新しい時代の人間」であって、「人間」の創造は伯父の実験室に片付け、「労働のために直接役に立たないものはすべて捨ててしまい」、一切を「簡単化」して「一番経費のかからない労働者」を発明したのである。まさにこれこそが「人工の労働者」たる「ロボット」の「ロボット」たる所以である。「一番経費のかからない」ことが肝心のだから、一体一体外見を変えては割に合わない。「繊細なロボットと荒削りのロボット」の幾つかのバリエーションがあるくらいなのであろう。現に第三幕で押し寄せて来るロボットたちを見てガル博士は、ロボットを同じ顔にしたことを後悔する。せめて顔が違えばこれほどにぞっとする光景ではなかったろうに、と。その割に、「うぶ毛」まで植えるというのは、幾ら「繊細なロボット」にしても随分と「経費」がかかろうものではあるが。

「人間に酷似していて、しかも人間ではない存在を創り出すこと、現実の精巧な模造品を生み出すこと、——これこそ古来の錬金道士のひそかな形而上学的な夢であり、人形作りは、芸術の本道を踏みはずすことすら怖れずに、この昔ながらの願望を小規模に安っぽ

く実現するのである。彼らにとっては、芸術的歓喜よりも、この安っぽい実現の方が、はるかに大きな歓喜なのである」。これは澁澤龍彦が『夢の宇宙誌』で描き出した従来の人造人間製作者の像である。本道を外れていた筈の人形作りのマニエリスティックな道が、産業革命や市民社会の勃興に伴う機械崇拜の風潮の中、一転して本道になってしまい、つまらないものになってしまったと澁澤は評する。「若い方のロッセム」はこのような「歓喜」を顧みない。だがそれはこの歓喜が「安っぽい」からではなく、「人間を十年もかけて作るなんてナンセンス。自然より速く作れないなら、こんなくだらないものは全部やめにした方がいい」という、より「安っぽい」行き方である。彼が目指したのは人間の酷似物ではなく、労働のためにならない一切を捨て去った人型労働作業体なのである。

このように、端から「人間」を創造することを目的とせず、ただただ安価な労働者を生産することだけを目的としたにも拘らず、この「労働者」が叛乱する。ここに、猛烈に発展する機械や技術、さらには工場での生産過程への漠然とした不安を看取することは容易であろう。『メトロポリス』の地下労働者たちの労働は、細分化された一箇所のみ延々たる反復作業であった。チャップリンが『モダン・タイムス』でベルトコンベアー式のものづくりが人間性を破壊する真を描いたのは三六年であった。『ロボット』はその逆に、ベルトコンベアー式生産品が叛乱してしまうかもしれないという真を描いている。とはいえロボットはいつの間にやら心を持つてしまうのではない。ヘレナの望みでガル博士が「生理的關係素」を変えて意図的にロボットに心を与えたのである。ここでもまたチャペックはマッドサイエンティストの類型から努めて離れている。ロボットのラディウスにヘレナは、「ラディウス、あなたは他の者より上等なのよ。あなたを他の者と違うように作るのにガル博士はとっても苦労したのよ！」と恩着せがましく言うが、しかし当のガル博士はラディウス一体にこの試みをしたのではなく、「何百体」かにこの改造を施したのである。確かにガル本人が「私がしたのは単なる試作で、何百体というところさ」と言い、ブスマンが「ということはだ、百万体の古い良いロボットに対し、一体のガルの改造型という割合だ」、それだからロボットが叛乱したのはこの改造のせいではない、と述べはするが、それにしても「何百体」である。愛着のある一体を特別に改造したわけではない。

もう一つ、『ロボット』がその他の「人造人間」や「自動人形」の物語と大きく異なっている点がある。しかしそれは、「労働」ではない。人間のために労働するだけなら、従来の物語でも強調されたことがある。そうではなくて、この戯曲が異彩を放つのは、労働から帰結する「生産」を徹底的に強調している点である。ロボットの存在理由でもあるところの、労働と呼ばれるに相応しいのは、何かを「生産」することである。だから、この作品の登場人物の中ではただ一人「生産」を行うアルクビスト建築士は、ラディウスにより、

「これはロボットだ。ロボットと同じように手を動かして働いている。家を建てている。働くことができる」として、最後の人間として生かしておかれる。しかしヘレナの乳母のナーナも、言ってみれば自身の手を足を動かして働いているのである。ファブリ技師やガル博士も「手を動かして」働いていると言えよう。彼らはまた料理も得意である。しかし、ロボット基準では生産ではないので労働とは看做されない。逆に、ヘレナが初めて工場にやって来た頃、彼ら人間は、生産に飽いていた。「話すことときたら生産の話ばかり、一日中、いや来る日も来る日も——まるで呪われた者たちのようにです」とは社長のドミンの台詞である。勿論ロボットは、人間を生産労働から解放することがそもそもの目的であった。パンを布地を、ずっと廉価に生産すること、そのためにロボットが用いられるのである（とはいえ生産とは無縁に思われる掃除夫ロボットもいたようではあるが）。

しかし生産としての労働、或いは労働としての生産は、実はこの物語では表面的な生産でしかない。本来の生産とは生殖を指す。この作品を貫く主題が愛であることは一目瞭然であるが、この愛は驚くほどに生産の面が強調されている。星莖調とは無縁なのである。恋の芽生えから、鞘当、達引、そして婚約、云々といった恋愛劇は序幕で唐突に済まされてしまう。そして第一幕は一気に十年後に飛び、ドミンとヘレナの夫婦からはしかし子供が出来ていないことが強調される。即ち彼らは未だ「生産」していないのである。ヘレナの乳母ナーナがロボットに悪態を吐くとき、つまるところは「だって子供は産めないし、犬だって仔犬がいるし、何にだって子供がいるのに——」と、その本来の意味での「生産性」のなさを突くことになる。しかも彼女がこう言ってロボットを斬り捨てたとき、ドミンとヘレナの夫婦のみならず、世界中で子供が生まれなくなっていた、つまり人間もまた非生産的になり、もはやロボットに対する優位は何一つなくなっているのである。

しかし単に子孫繁栄を謳うのであれば、面白くもない。生殖としての「生産」の強調においてこの戯曲が更に目を惹くのは、この「生産」は人間が、或いは人間に似たものが、自ら意志して「生産」する、或いは出来る、そういうものではない、という点にある。ロボットの暴動に直面したロッスム社の幹部たちの会話の中で、営業担当重役のユダヤ人ブスマンが、ロボットを増やしすぎたことが暴動の原因だと指摘し、それから社長のドミンに向って言う、「あんたって人は結構なお方さ！ 生産の主人公が社長だなんて考えているのかね？ そんなことなんて、生産をつかさどっているのは需要です。世界中が自分のロボットを欲しがったのです。われわれはただその需要の雪崩に寄せられていたのです」、と。実はこれがこの戯曲の最重要箇所である。愛なら、ドミンとヘレナの夫婦の間にもある。しかし「生産」は自由にならない。勿論この点だけなら何も特筆に値する事柄ではない。不妊に悩む夫婦もいれば、所謂「でき婚」もある。ヘレナも、このような通り一遍の

意味には気づいていた。ナーナに子供の出来ないことを指摘された際に、「なぜ、私におさずけにならなかった——やだわ、私にどうにかできるってものではないわよね？」と独り言つ。但しナーナは、人間が神のように「人間」を作り出そうとした不信心を咎めるのであって、子供が生まれないのは神の罰だと解した。ヘレナもそのように受け取る。しかしヘレナは、ナーナに「あんたのいう意地の悪い神様に何かしたかしら？」と言うように、神を盲信しているわけではない。だから単なる神の怒りとは違った何かに、子供が出来ない原因を思い、怖れる。ヘレナは、上の独白の直後に窓からアルクビストが通るのを見て、お喋りに来るよう呼びかける。「かまわないわ、そのままの恰好でいいのよ！ あなたが職人の姿のとき、とてもかわいいんですもの！」そして鏡で自らを眺めながら、「なんで私におさずけにならなかったの？ 私に！」と再び問うも、「お前にはどうにもできないわよね？」という結論にしか至り得ず、しかし「ああ、私怖いわ！」と何かに不安を感じる。アルクビストへの呼びかけが実に示唆に富んでいる。アルクビストは「手を動かして働いている」唯一の人間なのである。そしてヘレナは今、自分の許に呼ぶにあたり、その働いている恰好のままで、と注文をつけているのだ。

もはや明らかであろう、ここで強調されているのは、「人間」がその深いところで最早「生産」を欲していない、という事態なのである。「生産」に従事する人間は今や珍しい。「生産」はロボットに任せて「人間はエンジョイする以外何も、なんにも、まったくする必要がない」という「楽園」に辿り着いたのである。ただ享受するだけの「いまいまいしい楽園」に。あらゆる「生産」が忌避された結果、子供の「生産」もまた忌避されてしまっている。

「非生産性こそ、ヘレナ夫人、人間に残された最後の可能性になりつつあるのです」というところにまで事態は来てしまっていた。最早、人類が破滅から救われるという奇蹟を待つということすらあり得ず、「実を結ばぬ花は散らねば」ならない。

チャペックはこのように考えたからこそ、この戯曲の最後を愛への讃歌で締め括る。しかし讃えられる愛は生産に直結した愛であり、愛ゆえに生産が続く。生産労働に従事するロボットが遂に愛を手にしたことで、本来の生産もまた可能となったのである。そして同時に「生命」が讃美される。ここでの生命は個々人の生命ではなく、それよりもっと大きな流れとしての生命であり、この生命によって、人間はこれまで長らく生かされて来た。そしてこの生命からすれば人間はもはや生命を担うに相応しい存在ではなくなった。だから「われわれ」人間は亡ぶが、ロボットが「生命」を担う。「生命」は亡ぶことなく連続する。「生命」は「生産」によって連続し、その際「愛」がこれを可能とするのである。

「ロボット」と違い、従来の自動人形は何らかの目的のために生み出されるものではなかった。人間が愛の対象とするために作り上げたのである。先に挙げたように、澁澤が機

械が主流となるに伴い機械仕掛けの人形もまたつまらないものになっていったと評するのは、まさにそのような人形に、目的が、それも「労働」という目的が、強く付されてしまったことによる。「たとえば自動人形だとか、複雑な装置のある時計だとか、噴水だとか、花火だとか、オルゴールだとか、びっくり箱だとか、パノラマだとか……すべてこういった非実用的な、機械と玩具の合の子みみたいな巧緻な品物には、なにかしら、正常に営まれるべきわたしたちの生産社会に対する、隠微な裏切りにも似た、ふしぎな欺瞞の快樂にわたしたちを誘い込むものがあるであろう。それは芸術的感動ほどオーソドックスではなく、明らかにそれとは別種のものであり、どちらかといえば、うしろめたい快樂に属すると言った方がよいかもしれない」（『玩具について』『夢の宇宙誌』）。澁澤は、生産を良しとする社会においては本道を進む技術者と、それに対するアンチテーゼを意識的に打ち出そうとする芸術家との間の、「生産」とは無縁なところに、自動人形などの魅力を見ていた。アンチテーゼを樹てる芸術家もまたその「アンチ」という点で「生産」に囚われたままなのである。「何のために？」、更には「何の役に立つ？」という問から離れたところに自動人形はあった。人間に代る生産労働を事とする「ロボット」は、そうした魅力とは全くの別物である。だから「美」を問うても「何のため？」という問から離れられない。ロボットのヘレナが発する「美しいってことは何のためなの、何なの？」という問がそれを如実に表している。「生産」の「愛」のため、であることは明らかである。

また澁澤は別の書で、人間造出についてのヨーロッパの理解に「女性原理」が欠けていることを指摘している。「つまり、胎児を発生させるのは男性の精液のみの働きであって、女性は単に子宮を提供するにすぎないという考え方である」（『悪魔の創造』『思考の紋章学』）。女性の子宮の代りに人工子宮から、男性原理のみで一個の生命を作り出そうとするのが、ヨーロッパの人間造出の歴史なのだ、と言うのである。彼はここに生命の連続への嫌悪を読み取る。ホフマンやリラダンらロマン派の作家たちは好んで魔術師めいた父のイメージを復活させたが、「彼らは生命の連続を嫌悪していたから、あえて父たることを選ばなかったのだと思われる。このように、むしろ現実の父たることを拒否する立場のものが、ひそかに架空の父に自己を擬して、人形を愛するのではあるまいか。そして、それこそ人形愛好のメカニズムなのではあるまいか」。ここでの「生命」或いは「生命の連続」は、チャペックとは違い、個人の生命や血の繋がりというごく普通の意味である。「生命の連続を嫌悪」するこれらの「人間造出」譚とは反対に、『ロボット』は「生命の連続」を讃美して終るのである。ここにもまたこの物語の特異な点を見ることが出来よう。

そしてこの「女性原理」の欠如という設定は日本にも綿々と受け継がれた。『鉄腕アトム』が恰好の例である。天馬博士が死んだ息子の身代りとしてアトムを作ったという事情がそ

もそも適合しており、さらには「ロボット法」の「ロボットはつくった人間を父と呼ばなくてはならない」という条項に至っては「女性原理」の欠如を甚だ強調したものである。

『人造人間キカイダー』も死んだ息子の代りとしての人造人間ジローという設定を踏襲し、このジローは自分を作った光明寺博士をやはり「おとうさん」と呼んだ。現在もまた、『ローゼンメイデン』のドールたちは自分たちの製作者のローゼンを「お父様」と呼ぶ。この例は枚挙に遑がない。しかしどうも「ロボット法」のように「父と呼ばなくてはならない」とまでに定めている例は、他に類を見ないようである。

似たような点は、実はこの『ロボット』にも見られる。ロボットにはロボット自身の生産が出来ず、種(?)の存亡の危機に怯える彼らが、唯一生き残っている人間のアルクビストにロボットの作り方を教えるよう詰め寄る第三幕前半に、ロボットのこのような台詞がある。「何千というスチーム子宮を建設しよう。そこから生命を川のようにあふれ出させよう」と。直後には別のロボットの「人間がわれわれの父なのです!」という悲鳴もある。しかし、「年寄りのロッスム」と「若い方のロッスム」という二人の男が作りあげたロボットだが、ヘレナが心を与えており（厳密にはガル博士が行ったのだが、実行に踏み切らせたのはヘレナである）、その結果最後にロボットの間に愛が生まれる。何より男と女のロボットの間に「愛」が生れてようやく「生産」に至るという点からは、「女性原理」の欠落は認め難い。

2. 藤子・F・不二雄『ドラえもん のび太と鉄人兵団』

愛に目覚めた二体のロボット、プリムスとヘレナは、最後の人間アルクビストによってアダムとエバとして実験室から外へと送り出された。この二体の今後を髣髴とさせる物語が、実は『ドラえもん』にある。大長編（映画）第七作『のび太と鉄人兵団』である。

『ドラえもん』もまたロボット物語であることには違いないが、話の中心は「ひみつ道具」であり、「ひみつ道具」を使うのび太たちである。ロボット自体が主題となることは稀である。ドラえもんが「生れ出づる悩み」に苦しむこともない。ついでながら指摘しておけば、ドラえもんは「ロボット工場」産の工場生産品なのであって、同型のロボットは大量に存在する（この点は『火の鳥 復活篇』のロビタが実に興味深い像を与えてくれるが、今は指摘のみに止める）。また、人型ではなく猫型なのである。人型でないロボットが中心となる物語はひょっとして他に類を見ないのではないか。また「ドラえもん」は、「女性原理」があるかないか、という間からは無縁のところ成り立ってもある。

さてその『のび太と鉄人兵団』は、宇宙のどこかの惑星メカトピアのロボット兵団が人間を奴隷とするために地球にやって来たのを、ドラえもんやのび太たちが撃退するという

お話である。このメカトピアに人間はいない。全てロボットである。三万年程前、銀河の彼方で栄えていた人間たちの内の一人の科学者が、我儘でよくばりで憎み合い殺し合う人間に絶望し、無人であったメカトピアに来て、そこでアムとイムというロボットを作り、ロボットたちが天国のような社会を作ろうと望んだ。その後アムとイムはロボットを増やし、地にロボットが満ちたが、ロボットの間に身分差が生まれ、貴族ロボットや金持ロボットが奴隷ロボットを使うようになった。しかし皆平等という考えが広まって奴隷制度が廃止された。新しい労働力として人間を使うことにし、今、ロボットの大軍が人間を捕獲しに地球へやって来た、というのがこの物語の前史である。ただ、現在のロボットたちにはアムとイムとを作ったのは神ということになっている。それで地球潜入工作ロボットのリルルはこのような歴史を説明して、ロボットは神の子、宇宙はロボットのためにあるの、と実に誇らしげである。しかし聞いていたしずかちゃんにとっては、どこかで聞いたような話に過ぎない。それ故に、まるきり人間の歴史じゃない、神様もがっかりなさったでしょうね、と返す。リルルにとっては、ロボットが人間の真似をしていると批難されたように聞こえ、怒って指から発するビームのようなものでしずかちゃんを撃つのであった。ここに示されたメカトピアの歴史を、プリムスとヘレナが「生産」するロボットたちもまた経るのであろう。『ロボット』のリーダー格のラディウスは「私には主人なんかいません」「私は他の者たちの主人になりたい」「私は人間たちの主人になりたい」と主張していた。そして第二幕で人類を滅亡させたときには、「世界はより力のある者たちのものだ。生きたいと思う者は制覇しなければならない。我々は世界の支配者だ。陸と海を支配する国家だ！ 星を支配する国家だ！ 宇宙を支配する国家だ！」と宣言した。このようなロボットであるところのプリムスとヘレナの世界が、アムとイムの世界となることは容易に想像できよう。アムとイムも、彼ら自体は「いい子」だったのである。

ところでこの物語で興味深いのは、何と言っても、メカトピアが三万年後には地球の人間を奴隷とするために狩るようなロボットの国になってしまった原因を「競争本能」（ラディウスの「より力ある者」「制覇」「支配」という語にもこれは顕著である）に見、それに対して「他人を思いやるあたたかい心」をアムとイムに植えつけておくことで、三万年後のメカトピアをがらりと違った国にしよう、という点にあることは間違いない（ここでタイムパラドックスを指摘したりするのは野暮の骨頂である）。ここにはここまでのリルルの心境の変化が重ね合わされている。つまり、少女の姿をとって地球に潜入し、ロボット兵団侵攻の基地を造ろうとしていたころのリルルは、メカトピアを発展させることが「宇宙の正義」だと信じて働いてきたのであった。このときリルルの心の中で作動していたのは「競争本能」である。これは、アムとイムを作った科学者自身によって、他人より少しで

も優れた者になろうとする心であり、皆が競い合うことで社会を発展させることに繋がるが、同時にまた自分の利益のためには他人を押し退け弱肉強食の世界を作り出すことにもなるもの、とされていた。まさに、下等生物である地球人はメカトピアのための奴隷となるのは当たり前という「競争本能」に従っていたのだが、しずかちゃんに助けられたことで思考回路がどうかしたらしく、まるで「他人を思いやるあたたかい心」が育ったかのようである。のび太やしずかちゃんに対する口調は、当初は如何にも支配者が下等生物に対するようであった。しかししずかちゃんの家を逃げ出して地下鉄の入口でのび太に見つかった際に、のび太の銃口に身を晒すときの口調や表情は、全く違う。そして撃てないのび太を逆にビームで撃ち倒すのだが、その際の「いくじなし」という語調や表情もまた「下等生物」に対するのとは全く別である。この変化は、祖国メカトピアを裏切ることも出来ないから自分をどこかに閉じ込めておいて、と頼むことにも現れている。奴隷狩りは悪いことだとあっさり転向するのもまた、方向性が変わっただけの、他人より優れた者になろうという「競争本能」なのである。なお「競争本能」は「頭脳」に植えつけられていた。「あたたかい心」は、博士の操るのが機械の操作盤なので漫画の絵からも映画の画面からもはっきりとはしないが、やはり胸に植えつけられたのだろうか。

また、この物語には四種類のロボットが登場する。一つはドラえもんであり、もう一つはミクロスであり、別の一つはメカトピアのロボットであり、最後にメカトピアの巨大ロボットのザンダクロス（メカトピア側にとってはジウド）である。ドラえもんは本稿で何度も繰返されている工場生産品としてのロボットであり、人間の労働の肩代り（ドラえもんはお世話ロボットであり、「肩代り」ではないかもしれない）をするロボットである。本来の意味に最も適ったロボットである。しかしそれにも拘らず『のび太とロボット王国』の冒頭で、スネ夫が犬型ペットロボットを自慢したときには、しずかちゃんがコアラ型を、ジャイアンがライオン型を、のび太はあろうことかクラゲ型を、欲するのであった。のび太が家でママにペットロボットをねだった際には、ママも家には既に猫型ロボットがいることを忘れていた。当然ドラえもんは、僕という猫型ロボットがいるというのに、と怒る。因みにこの物語に出てくる博士は「チャベック」という名である。

ミクロスは逆に手工芸品の類のロボットである。スネ夫の従兄が作り上げたラジコンである。これをしずかちゃんは「本物のロボットかと思ったわ」と表現。「本物のロボット」は自ら動く、というわけである。その後スネ夫とジャイアンにのび太と仲直りしてもらうためにドラえもんが「スネ夫君並みの知能」を持たせた（同時に「本物のロボット」らしく自ら動けるようになった）。元々のラジコンの時点でも、知能を持ってからも、ドラえもんより遥かに劣ったロボットなのだが、のび太はこれを所有するスネ夫を羨ましが。こ

の展開はお約束なのだが、話がこと「ロボット」を巡るだけに、そう簡単に見過ごせる点ではない。何故のび太が羨ましがったり、スネ夫やジャイアンやはてはしずかちゃんまでも感嘆したりするのだろうか。答はその二足歩行に尽きるであろう。ドラえもんも（猫型にも拘らず）二足歩行しているのだが、反重力で僅かに浮いており、またかなりの短足で膝関節がないように見えるときもある（都合に応じて胡坐や正座が出来たりするが）。ためにその歩行に恰好の良さはない。そして『鉄人兵団』は、ミクロスがズシンズシンと地響きを立てて歩くその足の大写真から始まる（より正確には町の俯瞰から。これはラストの伏線なので大切なシーンだ）。またドラえもんとのび太が鏡面世界で完成させたザンダクロスを動かした最初のシーンは、やはり足の大写真である（ザンダクロスがのび太の前に現れたのも、先ずは足（踝から下）が最初であった）。ドラえもんには残念ながらこれらのような歩行シーンを見ることは適わない。逆に、ミクロスは最初のラジコンの時点で既に背中からプロペラが出てきて空を飛べるのだが、それには誰も感心していない。喋れるようになって、しずかちゃんは「言葉が話せるのね」と口にするだけで、さほど驚いた様子も見せない。のび太やのび太のママは何の感嘆も見せずにしごく普通の対応をするだけであった。或いはミクロスはまた走ることも出来るのだが、そこにも誰も心を動かさない。やはり何と言っても、足を上げて、踏み出し、地を踏みしめるというあの一連の動作にこそ、羨ましがるのであり感心するのである。

メカトピアのロボットたちは、自他共に「ロボット」と名乗ってはいるが、最早「ロボット」という名前に相応しくない。件の博士の説明によれば、アムとイムとから三万年後の現在のロボットへは「進化」するらしいので、言うなれば無機物からなる知的生命体なのである。「ロボット」と呼ぶから紛らわしい。リルルの説く歴史に対してしずかちゃんは、ロボットは人間が人間のために作ったのよ、と言う。慥かに、最初は誰かに作られた、と彼女が予感したとおり、一人の人間であるこの博士の手によってアムとイムは作られたのであるが、それから三万年、人間のために労働するということなく子孫を「生産」し続けて来たのである。最早「人工の労働者」という意味の「ロボット」という名前には当らなくなっている。わけても「人工」という意味は皆無である。既に長らく「ロボット」が「ロボット」を「生産」して来ているのだから。

そしてザンダクロス。所謂「男の子の夢」たる、搭乗式人型兵器である。リルルは最初、破壊兵器ではなく土木工事用ロボットだと言い繕っていたが、のび太でさえ信じた気配はない。頭の部分にボール型の「頭脳」を搭載することにより、自分の判断で自由に行動できる筈のジュードなのだが、何故か操縦席がついている。しかも少なくとも人間が三人は座れる大きさがある。全く無駄で無意味な設計である。また一体しか送り込まれなかったこ

とは疑問である。しかしこれにより、少なくとも日本語で「ロボット」と呼び慣わされる全ての類の「ロボット」が一つの物語に勢揃いしたことになった。

3. かたちの問題

ところで、「ロボット」を問題とするとき、常に問われるのが「心」である。ガル博士は生理的関係素を変更することで心を与えた。メカトピアの博士はアムとイムに「心を植えつける」のであった。大長編の前作『のび太の宇宙小戦争』の冒頭には、「ロボッター」という「ひみつ道具」が登場する。これは、コンピューターと動力装置からなる粒であり、それを付けられたものはロボットになり、何でも言うことを聞き、命令しない限り勝手には動かない、というもの。通常連載でこの「ひみつ道具」が使われた際には、こき使ってすぐに捨てる人間（のび太）に対して叛乱を起す。この粒の中のコンピューターに「心」が含まれているのであろう。

『ロボット』でロボットに与えられた「心」は「duše」という語であった。この語は「ソウル」「ゼーレ」に当り、「魂」の意である（第三幕でロボットが、我々は機械だったが恐怖と痛みから「魂」になった、と言うときの「魂」もこの「duše」である）。今ここでは、「ブシュケー」「アニマ」「ゼーレ」「マインド」等々、「心」に対応する幾つかの欧米語を比較考察するつもりはない。欧米語で「心」に対応する語はもっぱら理知的作用を指し、日本語の「心」より遥かに狭い意味である、という点を指摘するに止めよう。「心理学」は日本人が一般にイメージする「心」についての学問とは違う、という指摘はよく知られている。また「duše」が「魂」だと言っても、日本語ならば「魂」と対になるのは「魄」であって、「身」や「肉」ではない。「魄」は白い骨のイメージである。

日本語の「心身」という対は古くからの対である。和泉式部の「おのが身のおのが心にかなはぬを思はば物は思ひ知りなん」や西行の「吉野山梢の花を見し日より心は身にも添はずなりにき」、鴨長明の「あれば厭ふ背けば慕ふ数ならぬ身と心との中ぞゆかしき」など、「心」と「身」とが対比的に使われている例は幾つでも思い起こされよう。

このように「心」が用いられるとき、何が言われているのだろうか。ロボットとの関わりでは、人間がロボットに心を植え付けたり与えたりすることが言われていたが、日本語では「心」は存在したりしなかったりするものではない。確かに「心」の有無が言われることはある。「をぐら山峰のもみち葉ころあらば今ひとたびのみゆき待たなむ」（藤原忠平）、或いは「心なき身にもあはれは知られけり鳴たつ澤の秋の夕ぐれ」（西行）。晩唐の魚玄機は「求め易きは償ひ無き宝／得難きは心有る郎」と詠んだ。また「有心」の歌とは和歌を言い、「無心」の歌とは狂歌を言う。逆に仏教では「有心」は未だ執着を離れられない

状態であり、「無心」になることが求められる。また俗には「無心」は金をねだる意味である。ロボットのように心を欠いて言いつけに従うこと、が「無心」なのではない。つまり、ロボットに心はあるか、という類の間は日本語として曖昧な問なのである。

ところでこのような詩がある。「男が男のからだのかたちしてしか／生きることのできないのはくやしい／かたちのないところだけであったなら／もっと自在にあなたと交われるものを／／だがことばよりくちづけで伝えたいと／そう思うときのこのころのときめきは／からだなしでは得ることができない／いつか滅ぶこのからだなしでは／／ころがどこをさまよってしようと／ころがいくつに裂けていようと／女がただひとつのからだのかたちして／いま私のかたわらにるのはかなしい」（谷川俊太郎「からだ」）。

ここでも「ころ」と「からだ」とが、対比的に語られている。しかし注目すべきは、この対比が明らかに「かたち」を巡って為されている点である。「かたちのないころ」同士ならもっと深く交われるかもしれないが、しかし「ただひとつのからだのかたち」をとって私のかたわらにあるからこそ「かなしい」のである（なおこの「かなしい」は古い日本語の意味で、「愛しい」でもあれば「哀しい」でもある。小林秀雄が「モーツァルト」に記した「確かに、モーツァルトのかなしきは疾走する。涙は追いつけない。涙の裡に玩弄するには美しすぎる。空の青さや海の匂いの様に、万葉の歌人が、その使用法をよく知っていた「かなし」という言葉の様にかなしい」という有名な文句を思い起こしても良からう）。心には「形」がなく、身には「形」がある。「ころ」はそれゆえさまよったり裂けたり、或いはあくがれいであり千々に乱れたり、出来るのである。しかし「からだ」はそうはいかない。年を経て二条の後が「かたわらに」いなくなってしまうと、「我が身ひとつはもとの身」（在原業平）のままなのである。

「心」という字は「うら」とも訓み、「おも」と対である。「おも」は「面」であり、「心」が外にあらわれるところが「面」である。そして「心内にあれば色外にあらわる」のであって、「面」には「色」があらわれる。「面」は慥かに「顔」を言うが、しかし「心」は「顔」のみにあらわれるものではなく、一挙手一投足にも身のよじりにも、つまり全身にも、あらわれるものである。形のない「心」が形をとってあらわれるところが「面」であり「身」である。だから例えば、世を捨てた筈なのに捨て切れていないその「ころ」持ちの形のあらわれとして「我が身」は未だ都に留まっているのだ（「世の中を捨てて捨てえぬ心地して都はなれぬ我が身なりけり」西行）、というわけである。

この観点から顧みれば、『古今集』『仮名序』の冒頭が思い起こされよう。即ち「やまとうたは、人のころをたねとして、よろづのことはとぞなれりける、世中にある人、ことわざしげきものなれば、心におもふことを見るものきくものにつけていひいだせるなり」。

つまり心がもやもやとした思いを抱き、それを形としたのが「ことのは」である。心の思いを形にするには、既に形ある「見るものきくものにつけていひいだ」すと遣り易い。万葉以来、寄物陳思は日本人にとってごく自然な技法である。そしてこの形は当然に「いひいだ」す形をもまた指す。即ち「三十一文字」という形である。逆に言えば、言葉として形にせぬ限り心は見えない。まさに「色みえでうつろふものは世の中の人々の心の花にぞありける」という小野小町の一首が示す通りに。そして心がとる形は身や言葉の他に、どんどん広がる。古着屋の着物（「古着屋に／女の着物が並んでゐる／売った女の心が並んでゐる」夢野久作）にも、畳まれたナプキン（「目に見ゆるころの如くナプキンのかたちやさしくたたまれてゐたり」大西民子）にも。

ところで本稿は「ロボット」論である。「心」についてのこの理解が「ロボット」にどう関わるのか。ロボットの「かたち」に、である。わけても日本に独特の、ガンダムなどの搭乗式人型ロボットという姿に、である。

ロボットは、人間の命令通りに自動的に働く労働物である。そしてまた道具である。道具に心や魂を付すのは、人間の原始的な考え方である。刀に魂を見たり、古道具に精霊や心が宿って動き出したりする、ということは、日本ではごく自然に受け入れられている。櫛や鏡には使用していた女性の念が籠る、とよく言われるように。思い出のよすがであるのみならず、まさにその物に「形」があらわれているのである。日本のみではない、「フェティシズム」という概念が示すように、似たような考え方は広く行われている。そして心や魂を託す対象は、今や工場からの生産品へと移っている。「それまでは隠れ家として、岩石草木のような自然物か、さもなくばごく単純な、玉とか鏡とかいったような生産物しかなかったのに、技術の進歩とともに、複雑な道具が作り出されて、かえって靈魂の住むところが見つかったのである。そもそも道具は人間の一部分だが、道具に対する人間は、いつも自然に対する人間の模写のごとき関係になっていることを思えば、この道具がやがて自然に取って代って、靈魂の住みどころとなる成行きは想像するに難くあるまい」（澁澤龍彦「付喪神」『思考の紋章学』）。恰好の例として澁澤は自動車やオートバイ、万年筆やライターを挙げるが、このいずれもが当然に工場から多量に生産される製品である。人が搭乗する自動車から搭乗式人型ロボットまでは僅かの距離しかない（そういえば永井豪が搭乗式ロボットを思いついたのは、渋滞の車の中でのことであつた）。

ロボットは技術の進歩が生み出したまことに「複雑な道具」である。そして人の形をしており、なおかつ「心」を欠いている。ここに人はごく自然に、「靈魂」を住まわせたり、「心」を付したりするのであろう。そもそもかつて「人形」は、穢れをそこに移して祓うためのものであつた。ガンダムなどをロボットと呼ぶことに我々が抵抗を覚えないのは、

あれが「心」を欠いた動く「人形」だからであろう。「心」は搭乗する者なのであり、そのあらわれがロボットという「形」なのである。だから操縦席に座る少年少女が、自分がそこに座ることに疑問を持ったりするとロボットは上手く動かない。逆にやる気に満ちて武器や技の名前を叫びながら操縦すると、ロボットは実に力強く動く。

しかしロボットは「人間」の命令に従う知能を具えた自動機械なので、人型にする理由はどこにもない。『銀河鉄道999』や『ナイトライダー』に登場する人工知能の付いた機関車や車もまた、ロボットと呼べる筈であろう。『のび太の海底鬼岩城』の「水中バギー」が知性に加えて怒ったり拗ねたり発奮したりしているのは明白である。寧ろ人間のために労働させるという目的のためには、機関車や車やバギーその他に人工知能を付して命令通りに動くようにするのが、効率の良い使い方であろう。しかしこれらをロボットと呼ぶことはないし、そう呼ぶことに抵抗があるのも事実だ。人型の意味は何か。『ロボット』が指摘している。そこではヘレナが、ロボット同士の間には性差は何の意味もないのに何故女のロボットを作るのかと問い、ドミンが答える、「女中とか、売り子とか、タイピストとかで——人がそれに慣れているものですから」、と。結局は人間にとっての「慣れ」の問題なのである。「ヒト」ならざる姿であっても、すぐに人間は慣れるであろう。『火の鳥 復活篇』の「ファーニィ」や『ユリア 100 式』のドール、『フェリーニのカサノヴァ』の人形のような特殊目的を除けば、人型は必要ないのではなかろうか。「ロボット」を作る目的は、安上がりの労働者であった。ポイントはあくまで「労働者」にではなく「安上がり」にこそある。安価でないなら、必要はない。現に産業用ロボットとして人型ならざるロボットは実用化されている。

それにも拘らず、我々はどうしても人の形のロボットにこだわってしまう。猫型で充分だ、とは思えない。それはロボットが、労働という目的はあるものの、何の労働か曖昧な道具だからに違いない。目的が具体的なら人型にはしまい（リルルのように人間の間に潜ることを目的とするなら人型にするのは当然だが）。しかし「ロボット」は、実に矛盾したことなのだが、これと定まった用途にではなく、時々に応じ様々に使われる道具である。下男下女のように、或いはお世話ロボットとして、側にあることが求められる。すると、主人の言うことを一々真に受けていては始まらない。どういう文脈で主人が命じているのか、「顔色を読む」ことが必要となる。心は色としてあらわれるが、あらわれた色を読み意を汲むこと。勿論読み間違ふこともある。間違つてよいのである。読まれないように粧うこともあるのだから（男に愛してもらえると勘違いした女が勘違いに気づいて別れる際に粧う精一杯の矜持を、中島みゆきが「流れるな 涙 心でとまれ／流れるな 涙 バスが出るまで」（「化粧」）と歌うように）。人間の命令を馬鹿正直に聞くだけでは不十分である。ド

ラえもんに知能を与えられたミクロスは、のび太の出した変な問題に二度も頭脳をショートさせて倒れる羽目になった。このときののび太は少々憂鬱であった。ザンダクロスが兵器だと気づいたので、ザンダクロスを鏡面世界に閉じ込めてしまってドラえもんとしずちゃんと三人の秘密だと約束した。それなのにその約束を破ってリルルにザンダクロスを返し、さらに「ひみつ道具」のお座敷釣堀まで渡していたからである。のび太のこの顔色を読めれば、やけっぱちのような謎々の答を聞いてミクロスが真剣に悩む必要もなかったのである。だがこれはミクロスの知能が「スネ夫君並み」なので仕方がない。ドラえもんだと、或るとき七夕の星が向いの家のアンテナから数えて何番目にあるか尋ねられた際に、「かぞえられるわけないだろ、バカだなあ」と斬り捨てるのである（尤も、この台詞にのび太は「またバカにした」と泣くので、お世話ロボットとしては正しい対応の仕方ではないだろう。しかしこういう点こそが、お世話ロボットとして完璧に過ぎるドラミちゃんよりも、ドラえもんを「友達」たらしめる）。またロボットアニメでは、搭乗者が敵ロボットの「顔色」を読むことがごく普通に行われる。テレビ画面上では操縦者同士の独白が会話のように構成されるが、操縦者自身は目の前のスクリーンに映し出された相手の機影を見ているだけである。しかし敵の動きからその操縦者の想いを読む。もし見えている姿が猫型であったら、どうであろう。或いは地球上の何とも似ていない姿であったら。

ロボット制作は、このようなやり取りを為し得ることを目標とするのであろう。これが「ロボット」と呼ばれるに相応しいものかどうかはさておき、このような物を人間の手から作り出すこと。このためには、猫型や犬型では意を尽くし得ない。ロボットに一方的に顔色を読まれるというのも不愉快なものである。ましてや大量生産された物体にである。だから猫型ロボットのドラえもんも、不恰好ながらも二足歩行して、擬人化された猫たrazるを得ない。それでこそようやくやり取りが出来る。やり取りすることに堪えられる。猫型や犬型では、言わば「心あまりて^{ことば}形たらず」なのである。

〔ドイツ・グライフスヴァルト大学博士論文執筆生（Promotionsstudent）〕